
月のない空、君と一輪の青い花

青柳朔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月のない空、君と一輪の青い花

【Nコード】

N6247C

【作者名】

青柳朔

【あらすじ】

最も大きなオアシスの、君主の娘であるクシャナは、十年前の初恋の人、イシュヴィリアナの王子アジムと再会する。彼は国を失い、逃亡の末にオアシスまでやって来た。しかし彼は十年前とはまるで変わってしまったていて ……。

1：再会

日の下で燦然と輝く銀髪の、目を見張るような美しさは相変わらずだった。

しかし、少年の時には象牙のように白かった肌は日に焼けてたくましくなり、静かな泉のようだった青い瞳は猛々しく燃える青い炎のようだ。その右の炎のすぐ隣には、十年前にはなかった傷跡もあった。一歩間違えばその炎の輝きを失わせていただろう。

この十年、自分はまるで変わっていないというのに、彼はこんなにも変わってしまったのだ。

姿や雰囲気だけではなく、身分すら ……

この大陸は六割は荒れ果てた砂漠に覆われている。

国といえるほどの国は海に面したわずかな平地で栄え、交易の際は海路を使うのがほとんどだった。砂漠の中にはオアシスに、小さな町が点在しているのみ、道という道など存在しない。よほど優秀な案内人がいない限り、砂漠を渡るのは危険な行為だ。もちろん、その案内を生業とした者もたくさんいるが。

この大陸の、最も広い砂漠の中にある、最も大きなオアシス。

地上の楽園、水の都、神に愛される土地。人々は大抵そんなふうと呼んでいた。

私はそのオアシスの君主を父に持つ。名前はクシャナ。オアシスの民には姓がないので、名前はそれだけだ。

人々が水の都とこの地を呼ぶように、このオアシスは水で溢れている。どの町も、どの国も、時には飲み水に困るほど水がないというのに、ここは長い歴史の中で水が涸れたという記録は一度もない。

この土地を記した歴史書は、今は亡きイシュヴィリアナのものが最古だ。

イシュヴィリアナ王国は、名を変えながらも千年以上続いた王国の中の王国。独自の文化が栄え、国土も比較的豊かだった。そのイシュヴィリアナの千年前の記録に、オアシスの存在は確かに記録されている。

そのイシュヴィリアナ王国は、一年前に滅んだ。

その国の正統な王位継承者であった彼も、国と共にこの世界から消えたはずだった。イシュヴィリアナを滅ばしたオルヴィス王国によって処刑されたと、人づてに聞いた。

イシュヴィリアナ王国第一王子、第一王位継承者、アジム・アブラシード・イシュヴィリアナ。確か、こんな名前だったと思う。長い名前は覚えるのが難しくてアジムという名前以外は確かではない。私と彼が出会ったのは十年前、当時私は七歳、彼は十三歳、兄も姉もいなかった私は、アジム様を本当の兄のように慕った。その感情はいつしか恋に変わったが、それはさほど不自然なことではなかった。

たった三ヶ月の滞在。

短すぎた私の淡い初恋。

初めて会った時は、神の遣いか何かだと思った。

美しい銀髪に、水面を映し出したような青い瞳、透き通るように白い肌。

眩しいくらいに、全てが真っ白だったのだ。

オアシスの民は色黒で黒髪、瞳は様々でも大体は濃い色。彼を見た後では真っ黒としか思えなかった。

「クシヤナ。この方はイシュヴィリアナ王国のアジム王子だ。王妃様が妹君を出産され、静養の為にこちらに参られた。アジム王子はその付き添いだ。後学の為の滞在でもあるのでくれぐれも邪魔しないように」

イシュヴィリアナ王国は、このオアシスに一番近い国だ。最短ルートで、天候にも恵まれれば一日で来れる。飲み水には困らないし、砂漠の中といっても町はあちこちに水路があるのでそれほど気温は高くない。砂漠越えさえ乗り切れば、静養にはうってつけた。

「はじめまして」

アジム様よりも頭二つ分くらい小さい私に目線の高さを合わせ、アジム様はにっこりと微笑んだ。

「……はじめまして、クシヤナといいます」

ぺこりと頭を下げると、アジム様は賢い子ですね、と私を褒めた。「クシヤナは私の跡継ぎ　オアシスの後継者ですから。もともと、頭の良い子ですがね」

そのせいか、少し子供らしくないのですよ、と父が付け加える。それなら、とアジム様が再び私に視線を移す。

「一緒に遊ぼうか、クシヤナ」
にっこりと微笑んで差し出された手。

同年代の子供は君主の娘というだけで、こんなふうに気安く遊びには誘ってくれなかった。

差し出された手は私よりもずっと色白だった。

しかし私の手を握り、引っ張っていく力は私の何倍もある。

変な人　　それが、アジム様の第一印象だった。

変わってしまった。

黒いベール越しから見ても彼は明らかに十年前の彼ではなかった。十年という月日は確かに人を変えるには十分過ぎるほどの長い時間だ。ましてアジム様の場合は、隣国オルヴィスに攻められ、父王が殺された。イシュヴィリアナは地図上から姿を消し、自身も身代わりをたててどうかこのオアシスまで逃れてきたが、アジム・アブラシード・イシュヴィリアナという男はもうこの世から消えたことになっているのだ。

それだけ劇的な日々を送って、人が変わらない方が可笑しいのかもしれない。

でも変わって欲しくなかった。

以前のアジム様と同じように、優しく微笑んで欲しかった。

アジム様のことを、この十年間忘れたことなどなかったのに。

「久しぶりだな、クシヤナ」

「……お久しぶりです。アジム様」

低い、大人の男の人の声に、少し怯えた。

ベールがあつて良かった。これさえあれば、アジム様からは私の顔が良く見えないはずだ。

オアシスでは、十歳を過ぎた頃になると少女はベールをかぶり、素顔を隠す。婚約者が決まり、結納を済ませるまでは身内以外の前ではずしてはいけない。古いしきたりだが、今もなお続けられている。

私の家のように使用人を雇っている家は多くない。家の中では来客がある時以外はベールをはずしている。そうでなければ食事の時や寝る時までベールをしなければならなくなるからだ。

大抵、私の年頃には婚約者が決まり、ベールをかぶっている少女は少なくなる。結納までではなく婚約者が決まればずしてしまう子も多い。私は君主の地位を継ぐため、十八歳の誕生日の、成人の儀まで婚約者を決めることができない。成人の儀で神を祭る祠で占い、伴侶を決めることになっている。なのでまだベールははずせない。

「様はやめろ、クシヤナ。俺はもう王子じゃないんだからな」

だったらその命令口調を止めたらどうなの、という言葉を読み込んだ。さすがにそんなこと言うのはまずいだろうが、横柄な態度が気に入らない。昔はもつと優しく、紳士的な人だったのに。

「おまえも、このオアシスも変わらないな。……少し安心した」

微かに、優しい微笑みを浮かべる。

しかしそう呟いた瞬間のアジム様の目は、とても悲しげだった。

「……アジム様」

争いのない、平和なオアシスで生まれ育った私には戦争がどうい
うものなのか想像できない。どれほどの人が死に、どれほどの悲し
みと痛みがあるのかを。……アジム様がどれだけの悲しみの中で生
き抜いたかを。

「様はつけるなって言っただろ、馬鹿か」

「
」
前言撤回。

この人は傷ついたり悲しんだり、そういう感情を持ち合わせてい
ない。

亡国の王子なんて儂い設定が、世界で一番似合わない男になって
いた。

1：再会（後書き）

高校生の時に書いた物語が気に入っていたので、加筆修正してこうして皆様のお目にかかりました。

楽しんでいただけたら幸いです。

どうぞクシャナの恋の行く末を見守ってあげてください。

2：幼い約束

「アジム様！」

オアシスの中を走り回って、やっとアジム様を見つけて駆け出した方がいいが、勢い余ってそのままアジム様に体当たりしてしまった。

「大丈夫？ クシャナ」

くすくすと笑いながらアジム様は私を抱きとめて、問いかける。

激突した痛みと恥ずかしさで顔を真っ赤にしながら、小さく「大丈夫です……」と答えた。

「クシャナは走るとすぐ何かにぶつかるね」

アジム様は私の真っ直ぐな黒髪を優しく撫でながら言う。十年前の私は当然べールなんて邪魔なものはしていなかった。

よくぶつかるのはアジム様だけで、それはアジム様に抱きとめてもらうのが嬉しくてわざとやっていたことだったが、今回はわざとじゃない。

「それにしても、ぶつかるほど急いでどうしたの？」

「どうしたのって……！ お父様がもうすぐアジム様がイシュヴィリアナへ帰ってしまうって！ 嘘でしょ？ そんなの嘘ですよね！」

一度言葉にすると、全てが吐き出された。決して離すまいとアジム様の服を強く握り締めた。

今にも泣き出しそうな私を見て、アジム様は困ったように、曖昧に微笑みながら私の頭を撫でる。まるで聞き分けのない子供を諭すように。

「……ごめん。クシャナ」

頭を鈍器で殴られたような気がした。

アジム様は認めたのだ。私が聞いた、お父様が言っていた、アジム様がイシュヴィリアナへ帰ってしまうという言葉を。

「いや」

「……クシャナ」

「いやです！ 行かないで！ 行かないで下さい！」
アジム様の首に抱きつく。

こんなのは我儘なのだと当時の私でも分かっていた。
いつかはアジム様はイシュヴィリアナへ帰ってしまうと分かっていたことなのだから。

「いけないで……」

頭の中で冷静な私が囁く。

むりに決まってる。アジム様はイシュヴィリアナの王子様なんだから。ずっとここに居るわけにはいかないんだ。

「……クシヤナ」

切なげなアジム様の声が耳に届く。吐息が首筋にかかった。

その声を聞いて胸が苦しくなった。

困らせたくないのに。

悲しませたくないのに。

しかし自分の中の感情を上手く制御して立ち回れるほど、私は大人じゃなかった。まだ七歳の子供に、ただ我慢しろというのはあまりにも残酷なことだっただろう。

別れの前夜、交わした約束があった。

「クシヤナ、約束できる？」

「何をですか？」

空には満点の星。月はなかった。

「待っていてくれる？」

「……アジム様をですか？」

「そう。待っていてくれるなら、いつか迎えに来るから」

待てというなら、いつまでも待ち続けられる。幼い私は純粹にそう思った。

「でも、私お父様の跡継ぎですよ。それにアジム様も……」

現実的に結ばれるのは不可能なだと、子供の私でもどこかで理

解していた。

しかしアジム様は微笑んで、私の頬を優しく撫でた。

「じゃあ攫いに来る」

「……ほんとうに？」

「本当に」

そう言っただけ微笑んだアジム様の顔を、今でも鮮明に思い出せる。

この十年、少しだけ期待していた。妹の婚約者が決まる度、友人が嫁いでいく度に。

いつか、アジム様が来てくれるのだと。

同時にそれがどうしようもなく儂い夢なのだと分かっていった。

「すっかり、変わっていらっしやいましたね。アジム様は」

クシヤナはアジムに挨拶を済ませたあと、自室へと戻った。

お茶を注ぎながら、侍女のイーシャがしみじみと呟く。

「でも、なんとというか紳士的な方も素敵ですけど、ああいうたくましい方は魅力的ですよ。侍女の皆も大騒ぎですよ」

「あんまり騒ぎ過ぎないようにね」

クシヤナはため息と共にそう注意する。

アジムはあくまでも元・王子なのだ。ここに匿っていることが知れば間違いなくオルヴィスとの問題になる。戦争にはならな
いだろうが。

「冷めてますね。クシヤナ様？　せっかく愛しのアジム様がいらっ
しやっただっていうのに」

「誤解を招くような言い方はやめてよ！　私は、別に、その……」
クシヤナは真っ赤になつて口籠もった。

確かにアジムがオアシスにやって来ると聞いて浮かれもしたが、
再会の瞬間にあっさりと砕け散ってしまった。

「……少し困るわ。あんまりにも違いすぎて。昔のアジム様がいな

くなくなってしまったみたい」

記憶の中の彼と違いすぎて、頭が混乱している。

十年前の彼と、先ほど再会した彼がイコールで結ばれないのだ。

「しばらく滞在なさるんでしょうから、ゆっくりと考えればいいんじゃないですか。ここは神に愛された土地。どの国も手出しはできません」

イーシャがそう言って退出する。

もう少し居て欲しかったが、仕事がある彼女を引き止めるわけにもいかない。

「……神に愛される土地、か」

このオアシスの異名。恐らく世界で最も広まっている名前だろう。何百年も前から、このオアシスを狙う国は少なくなかった。理由は山ほどあるだろう。水源、砂漠の行路だけでも十分に価値がある。しかしこのオアシスが他国の侵入を許したことは一度もない。

軍を率いてやって来た国はいずれも砂漠で追い返される。砂漠の厳しい環境に耐えかねたり、ひどい砂嵐が起きたりして。

いつしかこのオアシスは不可侵の土地となった。

オアシスを襲えば必ずただでは済まない。国が滅びると。

だから最終的にアジムはここまでやって来たのだ。もし、万が一第一王子が生き延びたということがオルヴィスに知られても、オアシスにいれば手出しはできない。

「クシャナ」

どこからか、クシャナを呼ぶ声が聞こえた。

クシャナは周囲を見回す。部屋には自分一人。扉の向こうからでもないようだったのだ。

……アジム様の声？

まさか、と思う気持ちの方が強かった。しかし声はまた聞こえる。「クシャナ」

今度は声と共に窓を叩く音まで聞こえた。

急いでベールを被り、窓を開けると、案の定そこには銀髪の青年

が立っていた。

「アジム様、こんなところで何してるんです?」

「散歩だ散歩。おまえ何度言ったら様なしで呼ぶようになるんだ?」
言われてから、クシヤナはあ、と気づいた。

十年間の呼び方はそう簡単に直らない。

「すみません、どうも慣れなくて。アジムさ……ア、アジム。それは?」

言われて早々様をつけそうになったクシヤナを見て、アジムが微笑む。

アジムの手には青い花があった。散歩の途中とはいえ、二十三歳の男が持っているには明らかに不自然だ。

「ああ、咲いていたから摘んできた。好きだったろ?」

そう言いながらアジムはクシヤナに花を差し出す。

十年前にアジムから初めてもらったのが、この青い花だった。だから好きになったのだ。

「……覚えてたんですね。十年も前のこと」

「それでもそれなりに記憶力はいいからな。おまえの好きなものは大抵覚えてると思うぞ」

アジムは胸を張って自信満々に言う。

本当だろうかと疑ったが、とりあえず青い花がそれを証明していた。

「クシヤナ、嫌かもしれないが敬語もやめろ。このオアシスは国じやないし、おまえは姫じゃないが他国からすればここはかなり重要な土地なんだ。君主殿にはかなりの権限があるし、娘のおまえも同じだ。おまえが敬語を使う必要のある人間なんてどこかの王族に限られているからな。俺に敬語を使っていると、オルヴィスの耳に届いた時に面倒だ」

クシヤナは気づかなかった、自分の愚かさを呪った。

この平和な土地で生まれ育ったせいで、危機意識がどうも薄いらしい。

「 処刑されたんですよね? 」

アジム・アブラシード・イシュヴィリアナはもうこの世に存在しない。

実際は長年アジムの影武者を務めていた青年が、変わりに亡くなったのという。クシャナは見たことがないが、とてもアジムに似ていたという。

「 そうだ。俺の代わりに死んだ人間がいる以上、俺は死ぬわけにはいかない 」

「 イシュヴィリアナを取り戻そうとは? 」

「 思わない 」

きつぱりとした返答だった。

クシャナはその答えに多少驚いた。王族なら、自分が継ぐべき国だったのなら、取り戻したいと思うのが普通だろうに。

「 イシュヴィリアナは長く続き過ぎた。それが滅んだ理由だ。貴族は墮落し、政治が上手く機能していなかった。父上はそれを立て直すことができなかった。ある意味、オルヴィスによって変わっていくことは民のためにも良いことだろう。オルヴィス王は賢い男だと聞くからな 」

民のためだとしても、あなたの気持ちは?

クシャナはそう思っても、口には出せなかった。

彼の決断は王族として民を第一に考えた結果なのだ。クシャナが口出ししていいことはなかった。

3：繋いだ手

変わっていた、けれど変わってなかった。

自分の中で矛盾している答えにクシヤナは気づいていた。

「……………時々、ああいう顔をするのは卑怯だわ」

はあ、というため息と共にクシヤナは呟いた。

アジムは本当に時々、一瞬だけれど心臓が思い切り跳ねるほどの優しい微笑を浮かべる。それが決まってクシヤナを見ている時だと、鈍感な彼女は気づいていない。

本質は変わらない、たぶんそういうことなのだろう。

窓越しの逢瀬は毎日続けられた。

アジムにしてみれば散歩の途中の暇つぶしなのかもしれない。しかし律儀にも彼は毎日お土産を持参してくるのだ。決まって、十年前にクシヤナが好きだと教えたものを。

「クシヤナ」

そして今日も、いつものようにクシヤナを呼ぶ声が聞こえた。

しかしクシヤナは首を傾げた。聞こえてきたのが扉の向こうからだったのだ。

「……………アジム？」

「ああ、こっちだこっち。窓に行くなよ」

やはり声は扉の向こうから。どうしてだろうと思いつつも、クシヤナはそろそろと扉を開けた。もちろんベルはすでに被ってる。扉の向こうには当然アジムが立っていて、何か悪戯を思いついた子供のような顔をしていた。

「……………どうしたの？」

「散歩だ。町まで行くぞ」

クシヤナの手首を掴み、アジムは引きずるようにしてクシヤナを連れ出す。

「ちょ……………ちょっと！ どうしたのよ急に！」

「急も何も。おまえ毎日部屋に閉じこもってて退屈じゃないのか？」
それは誰かさんが時間関係なくやってくるからよ、とは恥ずかしくて言えなかった。実はアジムがやって来るのを毎日心待ちにしている、なんて口が裂けても言えない。

「俺も暇だからな、付き合え」

もう、と文句を言いながらクシャナは大人しくアジムについて行く。飛びそうになるベールを片手で押さえながらもう片方の手はアジムに握られている。

鼓動が早くなっているのはアジムの急な行動についていけないからだ、と自分に言い聞かせながら熱くなる自分の体温がこれまでになく心地よく感じられた。

一步町に出れば注目の的だった。

オアシスの町でアジムの銀髪は目立つのだ。

多少異国人の出入りはあるものの、やはり白い肌と銀の髪は色黒に黒髪のオアシスの民の中で一際目を引く。

「……随分と見られてるわね」

「まあな。慣れてるから気にならない。もう何度も一人で買い物に来てるしな」

クシャナのお土産を買うためだということは言われなくても分かった。

もともとアジムは王族で、人から注目されることには慣れているのだ。今更こうして見られても何とも思わないのだろう。

「でも羨ましいわ、アジムの髪は綺麗なんだもの」

日の光を浴びてきらきらと輝いている銀髪をクシャナは見つめた。

「おまえは、本当に変わってないな」

「どっついう意味よ」

馬鹿にされたのかと思ってアジ目を睨みつけるが、予想外にアジムは優しく穏やかに微笑んでいた。

心臓がどくと跳ねて、クシャナの頬が赤く染まる。

「十年前も、そんなようなこと言ってた」

「……そんなことまで覚えてるの？」

「恥ずかしくなってるクシヤナは俯いた。

当たり前だ、という返事が返ってきて、クシヤナは問いかけようと、口を開いた。

覚えて、いるだろうか。

十年前の、あの幼く優しい、切ない約束を。

月のない夜、別れの前夜に交わした約束。

しかし答えを聞くのが怖くて、クシヤナは黙ってアジムの横顔を見つめる。

「クシヤナ？」

視線に気づいたのか、アジムがクシヤナを見つめ返す。

なんでもない、と呟いてクシヤナはアジムから顔をそらした。アジムといる時はこの邪魔なベールが思いのほか役に立つと、クシヤナは苦笑した。

「……覚えてるか？」

ベール越しに見える光景に、クシヤナは息を呑んだ。

いつの間にか、あの約束を交わした、大きな木の下にクシヤナとアジムは立っていた。足元には青い花が咲き乱れている。ちょうど開花の時期なので、一面が真っ青だ。

「忘れるわけない」

あれは、優しい思い出だから。

クシヤナの言葉に、アジムは微笑む。

ああ、やっぱり変わらないんだな。

微笑む時のアジムの顔は昔のままだ。口調も悪いし、声も低い。面影など残っていないと思っていたのに。

「攫いに来る、か。オアシスの次期君主様に向かって凄いいこと言っ
たもんだな、俺も」

「あの頃は」

アジムだつて、イシュヴィリアナ王国の跡継ぎだつたでしょう。そう言うのは残酷に思えて、クシヤナは黙つた。

クシヤナを部屋から連れ出した時に握られた手はまだ離れない。大きな手がクシヤナの手を優しく、強く包み込んだままだ。

「こんな土地ばかりだつたら、戦争なんて起きないんだろうな」

わずかな国々は国土を巡っていつも争っている。どんなにわずかな水源でも、戦争の火種になってしまう世界なのだ。

「オアシスを去つて四年後には戦場に行くようになってた。あの時オアシスで生まれた妹も、母も戦が原因で死んだ。かつての王のせいで国は荒れたまま。父は必死でやってきたが効果はあまりなかった。俺は聖女と政略結婚させられそうになってたくらいだ」

どどん吐露されていく、王国の現状。

クシヤナはただ俯いて黙つた。

国の状況、彼がその時何を思っていたのか、想像したくても出来ない、自分が憎かつた。

「イシュヴィリアナの聖女を知ってるだろう？ 神の愛娘。額に聖なる印を持つ乙女。聖女と王族の婚姻なんて前代未聞だつた。常に聖女と王は対等だつたからだ。王は太陽、聖女は月。そんな風に言っていたのはいつの時代だろうな」

「その人はどうなつたの」

そこで初めてクシヤナは口を開いた。

アジムの婚約者のことだ、気にならないわけではない。

「……その子、で十分だ。クシヤナ。あれは今十五歳だからな。たぶん、オルヴィスに捕らわれているんだろう。処刑されたとは聞かないからな。彼女は王族と同じように利用価値がある」

そして王族ではないから、処刑しなければならぬ理由もないと、アジムが呟く。

「その子のことは、心配じゃないの？」

アジムは苦笑した。心情的には浮気を問いただされている夫の気分だ。

「そりゃ心配に決まってる。聖女　ノアは俺の妹みたいなもん……というかもう一人の妹そのものだったからな。だが、オルヴィス王も馬鹿じゃないって言っただろう？　ノアを殺すようなことはしないと思う。そんなことすれば民が蜂起するだろうから」

ノアという聖女に嫉妬していることに気づいて、クシャナは赤くなった。

彼女の方が、クシャナよりもずっと長くアジムと一緒にいたのだと思うと羨ましく、妬ましかった。

「どうして、その子を連れて逃げなかったの？」

アジムが本質的に昔のままならば、自分よりもきつと他の人を優先するだろうに。

アジムは町の外、砂の大地を見て答えた。あの向こうにはイシュヴィリアナが　今はもうオルヴィスとなってしまったアジムの故郷がある。

「連れ出そうとしたさ。でも無理だと、首を縦に振らなかった。俺には影武者がいても、自分にはいない。自分の顔を知る者はそう多くないが、額に痣があるような人間は自分だけだから誤魔化せないって。俺と違って殺されることはないだろうから、かまわず逃げろってさ」

「　　しっかりした子なんだ」

「まあ、そう言うかもな。……なんでこんな話になったんだ？」

こんな話するつもりじゃなかったのに、と首を傾げるアジムを見てクシャナは笑う。

「そう簡単に過去は忘れられないってことじゃないの？　アジムは結局まだ王子様なのよ。国を導き、民を憂うのが仕事ってね」

くすくすと笑うクシャナをアジムが恨めしそうに睨む。言い返さないのは凶星だからだろう。

「　　あっ」

油断していると、クシャナの黒いベールが風に攫われた。

高く高く空まで舞い上がり、ベールはどこか遠くまで旅立ってし

まった。

「どこか抜けてるとこも、相変わらずか」

何よ、と言いつ返そうとしてアジムを睨む。

邪魔なものを取り払った視界で見る彼に、クシヤナの心臓は飛び跳ねた。文句も全て飲み込んで、ただアジムを見つめた。

繫いでいない方の手で、アジムがクシヤナの頬に触れる。

「変わってないと思ってたが、間違いだったかな。綺麗になつた」

途端に、クシヤナの顔が真っ赤になる。

昔のままのほうがまだましだったかもしれない。飾り立てられた言葉で褒められる方が、クシヤナの心臓には良かっただろう。

飾り気のない、簡潔な言葉は何よりも胸に響く。

嘘じゃないと、お世辞じゃないと分かってしまう。

ばさ、とクシヤナの頭にアジムは上着を被せた。

「帰るか」

ボールがなくなつては帰れないから、このまま顔を隠せという意味なのだろう。

部屋を出たときから繫いでいた手は、アジムが上着を脱いだ時のほんの一瞬を除くと、部屋に戻るまで一度も離れることはなかった。

4：現状

「待ち人はまだですか、クシヤナ様」

そわそわと窓ばかりを気にしているクシヤナを見て微笑みながらイーシャが問いかける。

「わ、私は別にアジムのことを待つてるわけじゃ……」

「私はアジム様だとは言ってますよ。分かりやすいですねえ、クシヤナ様」

くすくすと笑うイーシャを睨みつけて、クシヤナは再び窓をちらりと見た。

もうとっくに来ていている時間なのに、今日はまだアジムがやって来ないのだ。もう日が傾き、太陽が沈みかけている。

「今日はいらっしやらないかもしれませぬね、ガジエス様がアジム様にお説教してましたから」

「ガジエス？」

聞かない名前に、クシヤナは首を傾げた。

「あら、ご存知ありません？ アジム様の側近ですよ。イシュヴェリアナからずつとついていらしたそうで。あんまりにもアジム様が出歩かれてばかりなので危険だと怒ってました」

「ああ、あのガジエスね。思い出したわ。アジムがまるで小姑だつて愚痴つてたの」

小姑という言葉を聞いて、イーシャが吹き出す。

「こ、小姑ですか。あのガジエス様が小姑……」

笑いを堪えているイーシャを見ながら、ガジエスと親しいのだからかとクシヤナは首を傾げる。

「ねえ、イーシャ。イシュヴェリアナについて 最近オルヴィスについて聞いたことはない？」

突然クシヤナが身を乗り出して問いかけてきたので、イーシャは驚いた。クシヤナは世界状況に興味があるとは思えなかったのだ。

「……どうしたんですか。急に」

「いいから。ねえ、イシュヴィリアナの聖女はどうなったか知らない?」

アジムに知らせたい。聖女が無事なら、きっと彼は喜ぶだろう。

もともとオアシスではかなりの情報が入ってくる。陸路で交易をする際はこのオアシスに立ち寄る者が多い。商人の中には情報を取引に使うものもいるし、人間は噂話が大好きなのだ。

「イシュヴィリアナの聖女ですか。そういえば最近　オルヴィス王と婚約されたとか聞いた気がしますけど」

「オルヴィス王と?　どうして!?　オルヴィス王は一年前にイシュヴィリアナを滅ぼした張本人じゃないの!」

怒り出したクシャナを宥めながら、イーシャは「そんなことは知りませんよ」と返した。

もしも自分が同じ立場なら、考えられない。無理だ。ましてオルヴィス王はもしかしたらアジムを殺していたかも　事情を知らない者にとっては殺したことになる人物だ。

「噂では仲が良いらしいですよ。オルヴィス王は随分とご寵愛なさっているとか」

まさか、と嫌な仮説がクシャナの中でたてられた。

もしも　オルヴィスを手引きしたのが聖女だったとしたら?

イシュヴィリアナがオルヴィスのものとなって、王妃の座につけば彼女はほとんど損失はない。損失どころか王妃の地位の方が宗教的に縛りのある聖女よりも自由かもしれない。

それなら、彼女が生かされている理由に繋がる。

「クシャナ」

イーシャが退出しようとする、入れ替わりにアジムがやって来た。窓からではない訪問はそうあることではない。

「アジム。今日はどこかに連れ出そうとしても無理よ。もう夜になるもの」

「さすがにそこまで強引じゃないさ。少し話をしようと思って」

そう言いながらアジムはクシャナにお土産を渡す。クシャナの好きな砂糖菓子だった。

「……ありがとう。イーシャ、アジムの分もお茶を用意してくれる？」

はい、と最初から心得ていたかのように礼をして一度退出する。

クシャナはイーシャが去ったのを確認すると、自分の立てた仮説を一気にアジムに話し始めた。

「 どう思っつ！？」

息継ぎする暇も惜しんで話したせいで息が切れ掛かっているクシャナを見て、アジムが笑い出した。

「ちよ 何よ！ こっちは真剣にねえ！」

「明らかに無理な仮説だよ、クシャナ。ノーアがオルヴィスと通じてイシュヴィリアナを滅ぼした？ 本気で言ってるのか？」

大笑いされて不機嫌になったクシャナは返事をしない。

真剣に考えたことを素直に話したただけだというのに、アジムときたら即効で否定して、涙を浮かべるほどに大爆笑だ。

お茶を持ってきたイーシャはふくれっつらになったクシャナと、大笑いするアジムを不審に思いながら、お邪魔だろうとすぐに別の仕事に戻る。

「クシャナ、イシュヴィリアナの聖女は王都のはずれにある月の塔で暮らしている。そして月の塔に入ることができるのは王族と許可された者だけだ。異国の者にはまず許可が下りないし、俺が知る限りノーアの知っている者はほとんど俺の知人だ。そんな彼女がオルヴィスと通じて なんて、無理な話だ」

「でも……それならどうして彼女は生かされて、しかも婚約なんてクシャナの疑問をアジムは簡単に解決してくれた。

「イシュヴィリアナの民からの反発を招かないための政略婚だろう。仲が良いというのだから本当に見たわけじゃないんだから定かじゃないしな」

確かに、聖女を知るアジムと知らないクシヤナでは初めから負けの分かった言い合いだ。

「でも 無事でいるんだな。安心した」

ほっと、安堵したアジムの表情。

あれ？

クシヤナは違和感を覚える。

見たかった顔のはずだ。しかしどこか違う。あの優しい、穏やかな笑顔とは少し違っていった。

分かりきっていたことを、再確認するような顔。

醜い嫉妬心は生まれなかった。

クシヤナは確信したのだ。アジムにとっての聖女は、本当にただの妹のようなものなのだ。

「じゃあ、そろそろ戻るか」

もう？ とクシヤナは立ち上がったアジムを見上げる。

イーシャの淹れてくれたお茶はまだ温かいままだ。いつもはもっと、他愛ないことで花を咲かせるのに。

「ガジエスがうるさいからな。それにもう夜だ。女の部屋にいるのは失礼だろう」

「あ、う……」

気がつけばもう外は真っ暗だった。

常識的に、日が暮れてから未婚の男女が二人きりで密室にいるというのは問題だろう。

赤くなって口籠もるクシヤナを見て微笑みながら、アジムが付け足す。

「ベールを忘れてるぞ」

ぼかん、と立ち尽くしたままクシヤナはアジムの背中が見えなくなるまで呆然としていた。

「あ、ああああああああっ！！」

やっと理解したクシヤナが、衛士が駆けつけてくるほどの大声を

出したのはアジムが部屋に戻ってからのことだった。

「うづうづう。恥ずかしいい」

翌日クシヤナはしっかりとベールを被ったまま、仕事をしているイーシャに付きまとった。

「何を今更　どうせ十年前には見られてたんでしょ」

イーシャは容赦なくクシヤナを邪魔だと追い払いながらきびきびと働いている。

「そうだけど、そうだけど　！　でも何ていうか綺麗になったなんてズバツと言われたら恥ずかしいし、何より私考えること全部顔に出ちゃうし　今までベールで誤魔化してたのいい」

「そうですねえ、クシヤナ様って嘘つけない人ですよ。私好きですよ、クシヤナ様のそういうところ」

にっこりと笑いながらイーシャが言う。付きまとっているクシヤナに、邪魔だからどこかに行けとその目は語っていた。

大人しく部屋に戻ろうかと考える。しかし部屋にいればアジムがやって来るかもしれない。

アジムに会うのは一歩的に気まずい。

「あれ？」

見かけない男を見て、クシヤナが立ち止まる。

格好からして商人のようだ。君主の家に入りする商人はほとんど決まりきっているので、クシヤナでも顔を覚えている者の方が多い。

「あの、誰？　見たことないけど」

イーシャに問いかければ、ああ、とあっさりと答えが返ってきた。

「最近取引し始めた商人ですよ、知らなくて当然です」

「ふうん？　珍しいわね、新しい取引相手を増やすなんて」

「扱ってる品が結構質が良いんです。もうすぐクシヤナ様の成人の

儀もあるので、その準備のせいでしよう」

クシヤナはきよとんとした顔をして、改めて自分の誕生日までの残りの日にちを数えてみた。

その数、一ヶ月と少し。

「……気づかなかった」

「楽しみですねえ、そのベールとももうすぐでお別れってことです。あんまり顔に出ないように練習でもしておいた方がいいですよ」

そうね、と小さく答える。

成人の儀で、クシヤナは将来の伴侶を決める。

正確には神の祠で祈りを捧げ、神からのお告げによって伴侶は決まる。オアシスの君主は、代々そうやって結婚相手を決めてきた。

拒否権はない。

誰かを選ぶなんて権利は、クシヤナにはなかった。

分かっていたはずでしょう、クシヤナ。

初めから　そう、十年前から。

叶うはずのない恋なのだ。

5：不安と影

くるくると変わる彼女の表情に、いつも和んでしまう。

本人は気づいているのだろうか。あんなにも分かりやすく顔に出ているということに。

つい触りたくなる。触ると、抱きしめたくなる。幼い頃には表面に出てこなかった欲があっさりと自分の壁を突き破ってしまいそう
で、困る。

縛り付けるものは何一つなくなった。

ここにいるのはただのアジムという男で、イシュヴィリアナの王子でもなんでもない。ただ一人の少女を愛しいと思う馬鹿な男だ。

同時に、彼女との差が広がった。

もとよりオアシスは他国と婚姻関係を結ばない。

だからイシュヴィリアナの王子であった頃、彼女と結ばれるのは絶望的だった。

しかし今ではオアシスの次期君主と、ただ男という身分差が枷となった。

どうやら自分は、神様とやらに、随分と嫌われているらしい。

「元気ないな、クシャナ」

いつものように昼下がりにクシャナの部屋の窓越しに話していると、心なしかクシャナはいつもの明るさがなかった。

「そ、そんなことないけど？ 大体ベールで顔が見えないのにどうして元気ないなんて分かるのよ」

「声で分かる」

アジムは即答すると、クシャナが降参とでも言いたげにうな垂れる。

「もうすぐ、成人の儀があるから」

「めでたい事じゃないか？ それとも大人になるのは嫌か？」

嫌じゃないわ、と返ってきて、アジムはますます分からなくなる。何が嫌だというのだろうか。

「……成人の儀で、婚約者が決められるわ。私に選ぶ権利はないの。このオアシスの中にいる者が、神様から選ばれるのよ」

「……………」

俯いたままで話された成人の儀の内容に、アジムは黙り込んだ。

さすがにそんなことは知らない。

だから、オアシスの君主は他国との婚姻を結ばなかった いや、

結べなかった、なのだろうか。

「詳しいことは教えてもらってない。お父様はその時になれば分かるって言って何も言ってくれない。オアシスを継ぐことに文句はないけど でもそんな結婚で、上手くいけるのかな、とは思っの。

お父様とお母様は仲が良いし、案外問題ないのかもしれないけど」

なんと言ってやるべきか、アジムは悩んだ。

政略結婚なんて山ほどある話だ。顔を見たこともない相手と結婚させられる人間も、珍しいことじゃない。

でもそうじゃない。

そうではない言葉をクシャナは求めているのではないだろうか？

「攫ってやるのか？」

クシャナが目を見開いた。

幼い約束。彼女は覚えていると言っていた。

「クシャナが望むなら……このオアシスから出て、どこか遠い国にでも行けばいい」

それはずっと欲しかった言葉だった。
小さな頃から、あの約束を交わしてから、何もかもを捨て去ってアジムと二人でどこかに行こうと、そう真剣に願っていたことがあった。

「ベールがあつて良かった。」

アジムの前ではいつもそう思うのだ。

クシヤナは流れ落ちそうになる涙を堪えて、平静を装った。

願つてはいけない。

「そんなこと、無理よ」

クシヤナはこのオアシスを継がなければいけない。ずっとそのための教育を受けてきたのだ。

幼い頃残酷にもそう無邪気に願つたように、このままアジムの手をとつて二人でどこか知らない場所で暮らせたら幸せだろう。

堪えていた涙が、頬を伝つて落ちた。

アジムはその小さな水滴を見逃さなかった。

クシヤナの顔を隠す黒いベールを奪った。あ、と小さくクシヤナが声を上げる。

「泣くな」

アジムの大きな手が、クシヤナの頬を包み込む。濡れた頬を自分の手のひらで温められたらと願う。

クシヤナは濡れた瞳でアジムを見つめた。

「泣くな、クシヤナ」

優しい声が甘く耳まで届く。泣き顔なんて見られたくないのに、顔をそらすことが出来ないのだ。いつも顔を隠してくれていたベールはアジムが奪ってしまった。

切なさを帯びたアジムの青い瞳に、吸い込まれそうになった。このまま時間が止まってしまったらどれだけ幸せだろう。

「アジム……」

好きだと、言えたら楽になるのだろうか。

そう思っで、すぐに否定する。それはお互いに傷つける言葉に
かならない気がした。

いくら想っても仕方ない。クシヤナはオアシスを捨ててアジムを
選ぶことが出来ない。自分の我儘で故郷を捨てるなんてクシヤナに
は考えられない。

同時にずっと側にいられたら、と思う。

イシュヴィリアナが滅び、アジムが処刑されたと聞いた時、心臓
が凍るかと思った。彼が生きていると知ってどれだけ嬉しかったか
なんてクシヤナ以外には分かるはずもない。

幼い恋だと。

過ぎた初恋だと。

もうそんな風には思えなかった。

クシヤナはまたアジムに恋をしたのだ。

いや、まだ恋をしている、なのかもしれない。

十年前から、クシヤナの恋は終わってなどいなかったのだ。ほん
の少し眠っていただけ。アジムと再会したことで、恋の眠りは覚め
てしまった。

アジムは部屋に戻ると、長椅子に深く沈みこんだ。
長いため息を吐き出して、天井を見上げる。

あやうく、キスしそうになった。

クシヤナの目には自分が確かに映っていた。名を呼べば、濡れた
瞳でじっと見つめ返してきた。

甘く響く声で自分の名前を呼ばれば、どんなに強固な自制心だ
って簡単に揺れる。

「 そんなこと、無理よ」

クシャナは自分よりも故郷を選んだ。

共にここから逃げるといふ考えは消し去られた。

自分は祖国の復興の道も捨てて彼女のもとまで死ぬ気でやって来
たというのに、残酷な話だ。

いずれ彼女は神の定めた婚約者と結婚し、オアシスの君主となる。
そんな彼女にキスして何になるというのだろう。ただお互いの心を
かき乱して、彼女を傷つけるだけだ。

「 ……アジム様」

「 ガジェスカ」

昔からの自分の従者であり、側近だ。気配だけで分かる。

家来はすべてイシユヴィリアナを発つ時に別れを告げた。イシユ
ヴィリアナから逃げろという最後の命令を下して。

なのに彼はまだ自分を主と仰ぐのだ。もうただの男だというのに。
「オルヴィスまで、アジム様の噂が流れてます。オアシスにイシユ
ヴィリアナの亡き王子に似た者が滞在していると」

「 ……そうか」

オアシスに来て一ヶ月と少し。意外と早かったかもしれない。

自嘲的な笑みを浮かべて起き上がった。

「 どうなさるのです」

「 しばらく、様子を見ようと思う。君主殿には伝えておこう。オア
シスに迷惑がかかるようならここも去る」

ふと、クシャナの泣き顔を思い出した。

彼女はまた泣くだろうか。行かないでと訴えてくるだろうか。オ
アシスの次期君主ともあろう彼女が、自分の前で十年前のように取
り乱すのだろうか。

まさか、とアジムは否定した。

彼女は自分の立場を良く理解している。幼い頃のような行動には

出ないだろう。

ちよつと良かったのかもしれない。

彼女が他の男のものになるところなんて、見たくもない。

泣くな。

頭の中で、アジムの声が響いて離れなかった。

頬を包み込むてのひらのぬくもり。切なげな青い瞳。甘く響く声。

ああ、どうしてあの手をとって逃げなかったのだろう

そんな愚かな考えさえ頭に浮かんでくるのだから、苦笑するしかない。

責任ある者には責任あるだけの義務がある。結婚もその一つは
ずだ。王族にとってそれは政略であり、オアシスでも大差ないもの
はずだ。

伴侶の選別方法は知らない。

神が選んだ相手としか教えられていない。

最近ではアジムが外出することもすっかり減った。長い会話を交
わしたのはあの日が最後で、その後はクシヤナも何かと忙しく、ア
ジムも目立った行動は控えているようで、宮の中で偶然会って、挨拶
を交わす程度にしか話せない。

それが悲しいのか、嬉しいのかよく分からない。

もう一度あの目に覗きこまれたら　もう一度手を差し出して逃
げようと言われたら　無理だと、言える自信がなくなってきた。

成人の儀が近づいていくにつれてその思いは強くなる一方だ。

「まあ、クシヤナ様！　綺麗ですね！」

イーシャが感嘆のため息と共にクシヤナを褒め称える。

ちやうど成人の儀に着る衣装を仕立てたので試着しているところ
だった。

今着ているのは青い衣装だ。裾に銀糸で見事な刺繍が施されている。幾重にも布が重ねられ、貴重な絹がふんだんに使われていた。

「ありがとう、イーシャ……」

答えるクシヤナには笑顔がなかった。

イーシャも主人の異変には敏感だった。もう随分と前からクシヤナが悩んでいることには気づいていた。

「クシヤナ様 嫌なら、無理にオアシスを継ぐ必要はないんじゃないですか？ 確かにクシヤナ様は第一子で、本来ならば継ぐはずの方ですけど……まだまだ君主様もお若いですし、下には何人も弟君も妹君もいらつしやるじゃありませんか。その中の誰かがお継ぎになればいいんです」

クシヤナはただ苦笑した。

それも考えたことだ。

クシヤナには弟が三人、妹が五人いる。オアシスではこれくらい兄弟がいるのが普通だ。六人の妹のうちクシヤナのすぐ下の妹はもう嫁いだし、その下も婚約者が決まっている。一番下はまだ赤ん坊だ。

しかし、自分が逃げ出せば幼い兄弟達が自分の背負っていたものを背負わなければいけなくなる。

「……大丈夫よ、イーシャ。継ぐのは別に嫌じゃないの。ただ少し不安なだけよ」

もう一つの衣装を見て、クシヤナは答えた。

クシヤナがまだ袖を通していない衣装は、成人の儀の為というよりは 最後の結婚式の為の衣装だった。

純白の絹に金糸と銀糸で見事な刺繍が刺してあって、帯は紅だ。光の加減で金色にも銀色にも輝いて見える。今までに見たこともないような、豪華な服だった。

結婚するのは成人の儀の後の、一ヶ月から二ヶ月先だ。ここに飾ってある衣装もこれで完成ではないのだという。

私はこれを着て誰の隣に立っているんだろう。

ぼんやりと、そんなことを考えてばかりいる。

「どうです？ 姫様。見事なもんでしょう？」

突然話しかけられて、クシャナは現実には舞い戻った。

クシャナに笑いかけているのは、最近出入り始めた商人だ。ついこの間までクシャナは顔も知らなかった。質の良い絹を扱っているので新しく取引が始まったのだ。

出入りしている商人などはクシャナを姫と呼ぶ。立場的には一国の姫にも劣らないのだからさほど不思議ではない。

「え、ええ。とても綺麗だわ」

「でしょう？ いやあ、最近戦争が多くてこういう衣装が売れなかつたんですよ。去年もイシュヴィリアナがねえ……あそこの文化は素晴らしかった。オルヴィイス王もそれが分かっているようで、イシュヴィリアナ人を迫害などしない。オルヴィイス人と同等に扱っているようで。これなら後世にあの素晴らしい文化が残るでしょうなあ」
そう、とクシャナは呟く。

アジムの言うとおり、オルヴィイス王は賢い人のようだ。

「しかしまあ、奇妙な噂がたつてましたよ。この間イシュヴィリアナに……ああ、今はオルヴィイスですな。オルヴィイスに行ったらですね。イシュヴィリアナの王子が生きているっていうもんで」

商人の言葉を聞いた途端、クシャナの背筋が凍りついた。

オルヴィイスでアジムの生存の噂が流れている。

「なんでもあちこちで見かけられていたらしいですよ。それで処刑されたのは別人じゃあないかってねえ。まあ、特に目立った特徴もありませんがね。イシュヴィリアナ人はみいんな銀髪だし、青い目なんて珍しくもない」

「そ、そうね　どこの国でだって王族の生き残りを期待する民は多いもの。ありふれた噂よね」

どうか動揺して声が震えたりしませんように。

アジムが本当に生きているなんて知られたりしたら、今度こそ彼は殺されてしまう。

「それだけ好かれてたつてことでしょうよ。イシュヴィリアナの王様も悪いお人じゃあなかった。ただその前があんまりにもひどかったからねえ」

ああ、どうかこのおしゃべりな商人がアジムのことを見ていませんように　見ていても忘れてくれますように　！

クシヤナは不安も全て吹き飛んで、それだけをただ祈った。

側にいらなくてもいい。ただ生きてさえいてくれればそれだけでいい。

叶わない恋のままでもいい。

お願いだから神様、どうかアジムを連れ去らないで　！

それから、商人が帰るまでの記憶は曖昧だった。

会話だつてあまり覚えていない。それどころではなかったのだ。

クシヤナはただ足早に父の元へ向かった。事実を知っているのは、恐らく父とアジムだけなのだろう。

「お父様」

突然やって来た娘にさほど驚きもせず、君主は座るように促した。

「お父様、オルヴィスでアジムの生存が噂されているって本当なの？」

「そうらしい」

短い返答。

父らしいと言えばそうなのだが、それだけで満足するようなクシヤナではない。

「どうするの？ このままじゃアジムが危ないでしょう？」

「クシヤナ、よくある噂だ。気にすることはない」

宥めるように、諭すように君主は答える。しかしその瞳の奥にはまだ隠されている秘密があるのにクシヤナは気づいた。

「お父様。ちゃんと話して。生きてるかもって、それだけじゃないんでしょ？」

君主はため息を吐き出し、降参した。

その強い瞳がしっかりとクシヤナを見る。

「オアシスにアジム殿がいるということまで、伝わっているらしい」
頭に殴られるような衝撃があった。

一瞬目の前が真っ白になる。

「……それは、噂なのよね？」

「ああ、噂だ。それをどこまでオルヴィス王が信じるかは分からない。一応は処刑されたということになっているのだから、簡単には行動に出ないだろう」

「アジムは 知ってるの？」

ああ、と君主は短く答える。

「万が一の場合には……ここから出て行くと言われている」
父の言う万が一がどういう場合なのか分からないクシヤナではない。

このオアシスも不可侵という暗黙の了解があっても、幾度か狙われたことがある。オルヴィスがオアシスに攻め入らないという保障はない。

もしも オルヴィスが軍事的な行動に出たら。

アジムは行ってしまふ。

遠いどこかに？

オルヴィスに？

それは分からない。けれど、そのときがきたらクシャナの恋もまた粉々に碎け散ってしまうのだろう。

7：亡霊

後先なんて考えていられない。

ただ今はアジムに会いたかった。

クシャナは執務室を出ると一目散にアジムの部屋へと走った。クシャナがアジムの部屋を訪ねたことは一度もなかったが、場所は知っている。

何を言おうとか、何がしたいとかそんなことは何も考えていなかった。

ただアジムの顔を見たいだけだ。

それでほっと安堵したいのかもしれない。彼はまだここにいると。

「アジム！」

返事も聞かずに扉を開けた。

文句なんて言われても気にしない。

「クシャナ、ノックくらいはしろよ……」

苦笑いを浮かべながらアジムが近づいてくる。

彼の輝くような銀髪を見つけたクシャナは力が抜けてその場に立ち尽くしたままだ。アジムはそんなクシャナを抱き寄せて部屋に招き入れ、扉を閉める。

身体が触れ合うところから体温を感じる。

「クシャナ？」

静かなままのクシャナの顔を覗きこみながらアジムが話しかける。

甘い声が脳髄にまで響き渡るようにクシャナを刺激した。

「アジム……」

羞恥心とかそんなものはどこかに捨て去った。ただアジムの胸に頭を預け、そっと抱きついた。

側にいたい。側にいてほしい。いつそのまま身体が溶けて一つになれたらいいのに。空気すらも二人の間に入り込めないように。

「クシャナ、何かあったのか？」

クシャナの長い黒髪をそつと撫でながらアジムが優しく問いかける。

「何かあったのは私じゃない。あなたでしょ。どうして言ってくれなかったの？ オルヴィスがあなたに気づき始めてるなんて……」

そんな、大事なこと。

クシャナを髪を撫でるアジムの手が止まった。

「聞いたのか」

困ったように呟く。

クシャナの中にふつふつと怒りがこみ上げてくる。

どうして教えてくれなかったの。どうしてそうやって子供扱いするの。私はもう何にも出来ない子供じゃないのに。

そうやって怒ることが子供のままなのだということにクシャナは気づかない。ただ十分に何も知らされないままアジムが姿を消していたかもしれないということが無性に腹立たしい。

「なんでそんなに悠長なの？ もしもオルヴィスがオアシスマで攻めてきたら今度こそ本当に危ないのよ!？」

「オアシスマでやって来ることはないよ」

アジムがきつぱりと断言する。

それがあんまりにも自身あげだったので、クシャナも言葉に詰まった。

「どうして、言い切れるの」

「オアシスにオルヴィス軍が来る前に俺はここを出て行くから」

「駄目!！」

何も考えずにクシャナは叫ぶ。

「そんなことしたら殺されに行くようなものじゃない! この世界で一番安全なのはこのオアシスでしょう!？ そこから出て行ったらオルヴィスだって躊躇ったりしない!」

他の国にいる王子らしき人だったら簡単に手を下すだろう。オルヴィスが慎重なのはここがオアシスで、オアシスが神に愛される土

地という異名を持つからだ。オアシスの君主に保護されている者に
そうやすやすと手は出せない。

「そうかもしれない。でも俺はここを戦場にするつもりはない」

戦場。

それはクシャナにとつとても現実味のない言葉だった。

このオアシスは不可侵の土地。クシャナの曾祖父の時代からこ
が他国に狙われたことはないし、戦場になったという記録もない。

確かにクシャナも考えた可能性だ。しかしアジムの言葉には想像
以上の重みがあった。

「この為なら、死んでもいいっていうの……？」

そんなことは望んでない。

アジムが生きていてくれるならいいのに。

アジムは誤魔化すように、曖昧に微笑む。

どうしていつもみたいに笑ってくれないの。優しく微笑んでく
れないの。そうでないのなら、あの意地悪な笑顔でもいい。

そんな顔しないで、お願いだから否定して。

「クシャナ。俺は亡霊なんだよ。国よりも自分の欲を選んでこうし
て醜く生きながらえている。そのために俺は自分の部下を身代わり
にした」

クシャナの願いも虚しく、アジムの口から否定の言葉は出なかつ
た。

「亡霊が、いるべき場所に行く。それだけだ」

「……いや」

クシャナは瞳に涙を溜めて、首を横に振った。雫が散って光を受
けてきらきらと輝く。

「いや。そんなのいや。アジムがいなくなるなんて耐えられない。

お願い。死なないで！ 側にいてくれなくてもいいから。それな
ら我慢できるから。死ぬなんて言わないで！」

悲痛なクシャナの声が部屋中に響いた。

俺には二つの選択肢があった。
処刑される前夜、解放されたあの瞬間に。

イシュヴィリアナの為に仲間を集めてもう一度戦うか。

ただの一人の男となって、ただ愛しい女のもとまで行くか。

王族として生きてきた限り、本来選択できるのは一つきりだった。自分の為に国を、民を捨てるなんて本来許されることじゃなかったはずだ。

勝ち目はないとしても、戦うしかなかった。
それなのに

『アジム・アブラシード・イシュヴィリアナは今この瞬間から、この俺です。あなたじゃありません。俺が残り少ない命を使ってあなたを助けるんです。無駄になんてしないでください』

ジルダス。

自分の影だった男。

小さな頃に町で見かけた同じくらいの少年を、気まぐれで助けただけだった。その少年が他人だというのに驚くほど自分に似ていたなんて、最初は気づかなかった。

恩を感じたからか、彼は何度も自分の命を救ってくれた。
彼は戦場で二度、アジムをかばって生死の境を彷徨った。

もう治ることのない病を患っていたことは知っていた。だからオ
ルヴィスとの戦いからは遠ざけたのだ。残り少ない命を安らかに過
ごしてもらおうと。

なのに、彼は最期まで自分の為に命を使うというのか。

『生きてください。アジム様。俺が生きれない分まで。気にしないでいいですよ。どうせ生きられても後数ヶ月の命です。あなたの為に死んで、あなたの名をもらって死ねるなら俺は本望です』

生き残る為の選択肢は一つだけだった。

自分が本当に選びたい選択肢と同じだった。

だから俺は選んだ。

ひどく遠回りをして、目的の水の都までやってきた。

ただ一人の、大切な彼女にもう一度出会ったために。

どれだけの命を犠牲にして、どれだけの人間が盾となって、俺は生きていけばいいのだろう。

少なくとも俺は一人の人間の命を背負わなければいけない。

そしてその死を受け止めなければいけない。

簡単に命を捨てるなんて許されないとすることは分かっている。

しかしその先にある犠牲を考えれば、自分一人の命など安いものはずなのに。

亡霊は俺じゃないのか。

ジルダス。

おまえが俺に呪いでもかけたのか。

生きるよ。

生きて足掻けよ。

俺の中で彼女の言葉がどれだけ強力かなんて知らないはずなのに。

8：迫りくる危険

泣き疲れて眠ってしまったクシャナを部屋まで運んで、ベッドにそつと横たえる。

頬には泣いた跡がすっかりと残っていたし、目は腫れていた。明日目を覚ましたらもつとひどい顔になっているかもしれない。

クシャナの髪を優しく撫でて、アジムは微笑んだ。

ただいとおしいと、クシャナを見て湧き上がる感情はそれしかなかった。

そつと額にキスをして、アジムは部屋から出た。

もうすっかり外は暗い。夜空には今にも消えそうなほどに細い三日月が、静かに輝いていた。

「アジム様」

部屋に戻ると、ガジェスがいた。

その顔から、何が言いたいのかは分かる。

「……動きは」

それでもアジムは問いかけた。ほんの少しの希望を胸に秘めて。

「国の仲間からの情報です。オルヴィスが動き始めました。近日中にオアシスの近くまで来るでしょう……どう、なさいますか」

希望はやはり簡単に消え去った。

アジムはため息を吐き出した。

「攻めてくる可能性は」

「……オルヴィス王が賢い男ならオアシスの近くまで来てあなたを炙り出そうとするでしょう。愚かな男だとすれば 攻めてきますね」

自分と同じ予想だ、とアジムは苦笑した。

過去の歴史から、普通の精神の持ち主はオアシスに攻撃したりしないだろう。

それは自らの破滅に繋がる。それは紛れもない事実だ。オアシスに手を出せば神の鉄槌が下る。

それでもオアシスを狙う者が現れるのは 人間の、欲のせいだろう。

「オルヴィス王は馬鹿じゃない。だが、周りもそうだとはい限らないからな」

「陛下のように、ですか」

ガジェスの呟きに、アジムは亡き父王を思い出した。

イシュヴィリアナを生まれ変わらせようと、努力していたが

周りの愚鈍な貴族はその力にはならなかった。むしろそれを妨害する邪魔なゴミだ。

「そうだな もう少し、様子を見たい」

オアシスを離ればそれだけ危険になる。まだオアシスに攻め入ったわけではない。

「オアシスの側まで来たら……その時は、ガジェス。用意してもらいたいものがある」

「用意、ですか」

おそらくガジェスは馬か駱駝かを想像していたのだろう。アジムが言つと、首を傾げて、それだけですかと問い返した。

「それだけだ。それで十分事足りる」

アジムの自信ありげな表情に、ガジェスは納得してわかりましたと答える。

優秀な部下を持って幸せだと思つべきところなのだろう、アジムはここまでついて来てくれたガジェスに感謝した。

あとは。

「神様とやらに賭けるしかないな」

自分の命を。

クシヤナが目を覚ますと、目は案の定ひどい有様だった。

まぶたが腫れて、見るも無惨な人相になっている。こんな顔ではアジムに会えないとクシヤナはため息を零し、ベールを被るということ自体を最近では彼の前で忘れがちであることに気がついた。

（そうか。ベールをしてれば顔は見えないのよね……）

そうやって顔が赤くなっているのを誤魔化していたことを、すっかり忘れていた。

しかしベールをすれば黒い鬘がかかったように、アジムの顔がよく見えない。あの輝く銀髪が褪せて見えてしまう。あの青い瞳が暗く淀んでしまう。

実際にはそんなことはないのだから、特に嫌がる理由はない。

しかしクシヤナはより鮮明なアジムの姿を目に焼き付けたかった。彼がいなくなってしまう、その前に。

「…………アジム」

それはもう確信だった。

彼はこのオアシスに留まらないだろう。いくら自分が願っても、きつとどこかへ行ってしまう。

止められないだろうか。

アジムを　この際オルヴィスでもいい。どちらかを止めれば、アジムはずっとここにいてくれるのに。

「クシヤナ様？　どこに行くんですか？　成人の儀まではあまり外出なされないように言われてるじゃないですか」

部屋を出て行こうとしたところで、運悪くイーシャに見つかった。

「　散歩よ。…………少しくらいいいでしょう？」

悲しげに、儂げに微笑む主を見てイーシャの胸も締め付けられるようだ。

「…………早めに、帰ってきてくださいね」

それなら目を瞑りますから、というイーシャの優しい言葉にクシヤナは素直に甘えることにした。

気がつけば成人の儀はもうすぐそこで、クシャナは準備に忙しく、そして正式な婚約者も決まるわけだからあまり外出しないように、父から言われた。固く禁じられているわけではないが、使用人達の目は父よりもはるかに厳しかった。

窮屈で、居心地が悪い。

そしてアジムの状況を思えば、クシャナの心は今にも壊れてしま
いそうだった。

この間までは一面に咲いていた青い花も、まばらにしか咲いてい
なかった。もともと命の短い花なのだ。

ここで十年前にアジムと再会を誓った。

今でもあの時のことは鮮明に思い出せる。月のない夜。星達だけ
が空で輝いていた。

ここからはオアシスの外の砂漠まで見渡すことができる。オアシ
スの端にある、小高い丘だからだ。

クシャナは足元に咲く青い花を一輪手折り、甘い香りを嗅いだ。

その芳香に少しだけ気持ちも落ち着いた。

遠く、砂漠の向こうにあるアジムの故郷を見つめる。

風が強かった。ベールが飛ばされそうになり、手で押さえようと
する。

「　　っ！」

クシャナの口から、声にもならない悲鳴が漏れた。

いつも見る、何も無い砂漠とは違っていた。

黒いベールが風に攫われ、クシャナの視界が明るくなった。自分
のその目が見たものが紛れもない現実であることを悟る。

黒い、群れ。

それは恐らく、何百、何千　　もしかしたらそれ以上の、人なの

だろう。

視力の良いクシャナにはその中にある旗まで確認できた。
赤い、深紅の旗。

「……オルヴィス」

クシャナは呆然と呟いた。

恐れていたことが、起きてしまった。

オルヴィスが、オアシスまで攻め込む気なのだ。

今はただ、牽制しているだけに過ぎないのかもしれない。しかし
それだけで引き返すなんて考えられない。

アジムはそれだけオルヴィスにとって危険な存在なのか。

クシャナは踵を返し、急いで宮へと走った。

恐らくもう父や、アジムには伝わっているだろう。

それならば。

彼は。

時折明らかにオアシスの者でも、商人でもない男とすれ違った。

恐らくオルヴィス軍の者がアジムを探しているのだ。銀髪の者はオ
アシスの中でひどく目立つ。

ベールを被っていないことなど気にもならなかった。

ただアジムに会いたかった。

こんなことになるなら、あの時。

『 攫ってやるのか？ 』

あの時、素直に頷かなかったのだろう。

あの手をとって二人でここから出て行けば良かった。

後悔しても、もう遅い。

9：失踪

走った。

息が切れても、それでも走った。

町の中で人とぶつかりながら、クシヤナはただ走った。

この人ごみの中に目当ての人がいるかどうか、見渡しながら速度はまるで緩めない。いたとしたらすぐに見つかるはずなのだ。

彼の姿を見誤ったりしない。

ベールも被っていないクシヤナの姿に門番が驚いても、クシヤナは無視して宮に駆け込んだ。

行く先も決まっている。

「アジム！」

クシヤナは宮の、アジムの部屋に一番に向かった。

一番彼がいるだろう場所がそこだったからだ。

しかし部屋の中は不自然に片付けられ、整頓され、人の気配などまるでなかった。

主のいなくなった、寂しい部屋。

宮の中を走り回って、ただ一人の姿を探す。しかしあの月の光のように輝く銀髪は見つからなかった。

いつもなら、すぐに見つかるはずの姿が見当たらない。

どこに行けば、アジムに会える？

焦る心は止められず、身体を動かし続けないと不安で足が竦んでしまいそうだった。

「クシヤナ様」

呼ばれて、振り返る。

イーシャが青ざめた顔で、そこに立っていた。どうしてそんなに

顔色が悪いのだろう。具合でも悪いのだろうか、なんて現実逃避した考えが頭に浮かんだ。

「……イーシャ」

呟いた声あまりにもか細いので、クシヤナは自分でも驚いた。

「君主様がお呼びです。……執務室まで来るようにと」

「お父様が……」

ふらり、と不安定な足取りでクシヤナは執務室まで足を運ぶ。イーシャは今にも倒れそうな自分の主を見て、こみ上げてくる涙を堪えた。

「お父様」

執務室に入り、そう呼びかけると、君主は俯いていた顔をあげた。喉がなぜかからからに渴いていて、上手く声が出なかった。父を呼ぶその声もかすれて、ひどく聞こえにくい。

顔をあげた父の表情が、暗い。

いつも威厳に溢れている父のこんな顔を見るのは、もしかしたら初めてではないだろうか。

きつと、自分もこんな顔をしているんだろうな、とクシヤナは思った。

「……クシヤナか」

心なしか、声もいつもより低かった。

胸の不安が一気に広がった。心臓が怯えるように震えだす。どくどくと、全身が太い血管になってしまったのではないだろうか。血の巡りが恐ろしいほどはつきりと伝わってくる。

聞きたくない言葉を、父は言おうとしているのではないか。……おまえに、言わなければならぬことがある」

今にも倒れそうになる身体を無理に動かしながら、クシヤナは自

分の部屋に向かった。

頭がひどく混乱している。

いや、もう何も考えられなくて、絶望していた。

どれが現実で、どれが真実で、信じるべきものはなんのかまるで分からない。自分で見たものを信じればいいのだろうか。それとも父の言った言葉を？

『おまえも見たんだろう。オルヴィス軍がオアシスのすぐそこまで来ている』

そう、だから知らせに来たのだ。アジムに、父に。危険だと。すべて夢ならいいのに。

儚い願いがクシャナの胸に浮かぶ。

部屋に戻ったらいつものようにアジムが、窓越しに微笑みかけてくれればいいのに。好きだったろ、と言いながらいつものようにお土産を差し出して、くだらない会話を交わすことができればいいのに。

『アジムは……逃げたんですよね。オアシスの外へ』

『分からない。ただ一言、出て行くと』

いなくなつたなんて。

私の前からいなくなつたなんて。

何も言わずに、何も告げずに、あの手を差し出すこともなく。十年前のあの別れの時でさえ、二人で別れを告げたではないか。優しく、切ない約束を残して。

「……………アジム」

部屋の扉を開けて、愛しい人の名前を呼ぶ。

呼べばきつと、彼が笑いながら姿を見せてくれるはず……………。

そこに、彼の姿はなかった。

いつも彼が姿を見せる窓辺にあるのは、青い花束。

アジムから初めてもらった花。私の好きな花。

「…………アジム？」

そつと、花束に触れる。

どこを探せば、これだけの花を集められたのだろう。あの約束の場所にだって、もうまばらにしか咲いていなかったのに。

柔らかい花弁に触れた途端、これが現実なのだと思い知った。幻じゃない。

『俺はここを戦場にするつもりはない』

全身の血が、凍った気がした。

目の前が真っ暗になる。昼間のはずなのに、どこにも光はない。呼吸の仕方さえ分からない。

ぼんやりとただクシャナは崩れこんだ。

もう立てない。もう動けない。

優しい風がクシャナの頬を流れる涙を撫でるように吹いた。それでも涙が乾くことなく、とめどなく溢れ出た。

どれほどの時間が経ったのか。

気がつけばクシャナの中の暗闇が、夜闇に紛れてしまった。相当な時間が経ったということだったのだろう。

窓の向こうに月はない。

あの約束の時と同じように、ただ星だけが輝いている。星だけの夜はひどく暗い。

暗闇の中で、青い花束だけが鮮やかに光って見えた。

「アジム ……」

悲しさに苦しみに耐え切れなくなったクシャナがただ一人、その

名を叫ぶ。

それでも悲しみは薄れない。胸を裂く痛みは消えない。頬を濡らす涙が、火照った身体を少しずつ冷ましていく。

冷たい夜風が青い花を揺らした。

はらりと花びらがクシヤナの頬を撫でる。

鮮やかな、優しい青。

彼の瞳と同じ色。

だから好きなんだなんて、アジムは知らなかっただろう。

「……アジム……」

優しい花束を抱きしめる。

甘い甘い香り。

優しいアジム。

死なないで。

生きていて。

それだけでいい。それだけでいいから。

10：成人の儀

アジムが姿を消して、二日経った。

今のところアジムがオルヴィスに捕まったという話は聞こえてこない。内密に処理されているのでなければ、アジムはどこかで生きているはずだ。

今夜。

私は成人の儀を行い、伴侶と出会う。

「クシヤナ様、大丈夫ですか？」

イーシャが遠慮がちに問いかけてきた。

作り笑顔で大丈夫よ、と答えた。心配させるわけにはいかない。

「……クシヤナ様、気づいてます？ クシヤナ様は嘘が下手だって無理してるくらい分かりますよ？」

イーシャの苦言に、クシヤナは苦笑した。

嘘が下手なことくらい、知っている。すぐ顔に出てしまうから、アジムにもよく笑われた。それでもベールで顔を隠していることが多かったのに、声ではれてしまっていたようだ。

「……本当に、大丈夫よ。初恋は叶わないものだって、よく言うでしょう？ イーシャ」

「そんなものは迷信です。叶う人は叶うんです」

「じゃあ私は叶わない人ね」

そんなこと、とイーシャが言葉を濁す。

そう言っただけに微笑むクシヤナはいつも以上に大人びていた。アジムがいなくなってからというもの、一日一日が短いようで、ひどく長い。ぼんやりとしていたらもう太陽は西に沈もうとしていた。

「着替えましょうか、クシヤナ様」

青い衣装を手にイーシャが呟く。

気が進まないせいで重たい身体を無理に動かして、さらさらとした肌触りの良い衣装を身に纏った。

「このベールも、今日で最後ですね」

仕上げに黒いベールを被り、準備は整った。

これから一人で水の祠に向かい、そこで待っている巫女と共に祈りを捧げる。詳しいことは全て巫女に、それしかクシャナには知らされていない。

「行って来るわ」

部屋を出て、宮の外へと向かう。すれ違う人々は皆跪き、頭を垂れていた。何十年に一度しかない、次期君主の為の成人の儀だ。オアシスの民皆が祝福する。

いつもは賑やかな町中も、今日だけはしんと静まり返っている。皆がクシャナが通り過ぎ、姿が見えなくなるまで跪いている。

一国の国王のような扱いだ、とクシャナは苦笑した。

水の祠はオアシスの隅、とても人気がないところにある。そこは君主と巫女以外は足を踏み入れることの許されていない、禁足地だ。

「お待ちしております。オアシスの姫君」

白い衣装を着た女性がそう言つて一礼する。

何度か会ったことがある　水の巫女。オアシスの象徴とも言える、水の声を聞く女性。

「すべて、あなたに従えと父から言われました」

「はい。ですがそう難しいことはありません。祠の中で共に祈りを捧げる、それだけです」

祠の中はその名のとおり、水で満たされていた。

人が立つことができる場所はそれほどなかった。しかしここに入るものは最大でも二人　君主か、次期君主か巫女だけしかないのだから、狭くても十分だった。

「祈ってください」

巫女はクシャナの顔も水に、ただ跪き、手を組んだ。
クシャナも困惑しながら、巫女に倣う。

祈ると言われても、何を祈っていいのか分からなかった。
無事に君主になれますように？ どうせクシャナが君主となることは決まっているのに。

世界の平和を？ 人類の繁栄を？ どれも祈るには大それたいて、
嘘っぱい。

祈りたいと思うのはただ一つだけだ。

アジム。

彼の無事を。

ただそれだけを。

ぴちやんと、水が落ちる音が大きく響いた。落ちた水滴は波紋を描き、やがて消えていく。湿った風が頬を撫で、水の匂いに肺の中が満たされていく。

どれほどの時間が経ったのか分からなかった。

ここは時間の流れを麻痺させる。

過ぎた時間が一分だったのか、一時間だったのか、または一日だったのか まるで分からない。

「クシャナ様」

巫女の声で、クシャナは現実に戻された。

「安心してください、イシュヴィリアナの王子はまだこのオアシスにいらつしやいます」

息を呑む。

巫女はクシャナに微笑みかけながら、水のように清らかな声で続けた。

「クシャナ様、あなたは神をなんでしょうか？」

「何を突然」

動揺しているクシャナには答えが出せなかった。

どうして巫女が突然アジムのことを話すのか、神について語りだ

すのか理解できない。

「この世界で神とは、すなわち水のことです。思い当たることがあるでしょう？ このオアシスは水溢るる都として、神に愛される土地と呼ばれる。水なきこの世界で、水は神そのものとなったのです。クシヤナ様、水は人を選びません。つまりあなたの伴侶を選ぶことはないのです」

「ではどうして今まで……」

君主は成人の儀で、伴侶を神に選ばれていたのか。

「このオアシスの君主として、神に愛される土地の長おさとして 君主の一族に入る者が、神に認められているのだと知らしめ、無用な争いを無くす為に。だからクシヤナ様、あなたは愛する人と結ばれていいんです」

巫女から聞かされる真実に、クシヤナは脱力した。

あれほど悩み、悲しんだというのに、現実はいじつにあっさりとしている。

「私は水の声を聞くだけです。クシヤナ様と王子の関係も、彼らが言ったことです。水はどこにでも存在している。彼らのような存在は、世界中のことを知ることができます。……その彼らが、王子はまだここにいますと言っています」

身体が震えた。

もう二度と会えないだろうと、覚悟していたのに。

「……行って、いいですか」

クシヤナの口から願いが零れた。

巫女は優しく微笑んだだけだった。

走った。

アジムがどこにいるかなんて、頭の中では検討もつかない。それでも全力で走っていた。

彼のもとへ行く理由も、定かではなかった。オルヴィスの者に見

つかつたら危険だからとか、ただ純粹に彼に会いたいのか、それも別の理由か。

一国の広さには及ばないものの、大きな町ほどの広さのあるオアシスでたった一人を、当てもなく探すなど、無謀なことに違いない。それでもクシャナの足はまるで当然のことのように、彼女の意識とは関係なしに、ある場所へと向かっていた。

十年前の、別れの夜。

あの青い花の茂る場所へ。

アジムとクシャナが、あの約束を交わした場所へ。

10：成人の儀（後書き）

もうすぐこの物語も終わりです！

ラストまではハイペースでいきたいと思えます。どうか最後までお付き合いください。

11：約束の場所

空には月がない。

本当なら細い月がひとつ、空に浮かんでいるはずなのに、どこかへその姿を隠してしまった。雲が折り重なり、弱々しい輝きを消し去る。薄暗い世界だ。

星だけが雲の切れ間から囁くように輝いていた。

走る耳元で風が鳴る。

何もかも耳には届かない。今日は成人の儀。オアシスの全てが静まり返る夜だ。

そこには何も無い。

ただ一本の大きな木があつて、足元には草花が生えているだけ。

ここで一つ約束を交わした。

ここで一回、絶望した。

彼との、ささやかな、溢れるほどの思い出はここにある。

「……………どう、して……………」

途切れ途切れの呼吸で、クシャナは呟く。

自分の目が信じられなかった。

暗い夜。黒いベールの向こう。本能は、確かにクシャナを最愛の人のもとまで導いた。

「……………アジム」

それはあまりにも小さな呼びかけだった。聞こえたのか、聞こえなかったのか。アジムは振り返り、そこにいたクシャナの存在に驚いた。

「クシャナ……………成人の儀はもう終わったのか？」

そう言って近づいてくるアジムの、あの輝く銀の髪は黒く染めら

れていた。肌もまるでオアシスの民のように、褐色になっている。唯一変化がないのは 燃え盛る青い炎のような瞳だけ。

後ろ姿でも あの輝く銀髪でなくても、不思議なことにクシャナにはすぐにアジムだと分かった。

「どうしてまだここにいるの!? 危ないって分かっているんですよ!? もうすぐそこまでオルヴィス軍がきてるのよ!」

クシャナはアジムの問いに答えることなく、叫んだ。

オアシスに 側にいてくれて嬉しいと思うのに、自分の身を顧みない彼の行動に腹が立った。

「だからこうして変装してるんだよ。銀髪に白い肌の男は目立っても、オアシスの民と変わらない髪と肌じゃあ見つからないもんだぞ。何度もオルヴィス軍の奴らとすれ違ったけど、全然気づかれなかった」

「そういう問題じゃ……」

確かに、オルヴィス軍が目印にしているのは銀髪と白い肌なのだろう。あれはオアシスの中では驚くほどに目立つ。

「 成人の儀はどうだった? 未来の旦那様を無視してこんなところにいるいいのか? 」

そんなことはどうでもいい、私が心配しているのはアジムなんだと、クシャナが睨みつけると、アジムは不敵に微笑んでいた。

そうして思い出す。

神は伴侶を選んだりしないと。

自分で選ぶのだと。

「……先に質問に答えてよ。どうしてまだオアシスにいたの? 」
悔しくてクシャナは話を逸らした。

ここでアジムに想いを告げてしまうのは、この男に負けたような気がしてしまうのだ。

「死ぬな、って言ったのはおまえだろ? 俺が身を隠して一番安全なのはオアシスだとも言ったな」

「だってそうでしょう? 事実オルヴィスはオアシスに攻め込むこ

とをまだ躊躇してる」

オアシスの中に本当にイシュヴィリアナの王子がいるのか確認してから　もしくは内密にその王子を捕らえられたら、そう思っているからオルヴィスは攻め入らずに近くで野営し、軍人を時折オアシスに入れてくるのだ。

「クシャナ、俺はあの時死ぬつもりだったよ」

オルヴィスに自分の存在が伝わった時。

もう逃げるのは疲れた。クシャナに会うこともできた。もう思い残すこともないと。

「正直、国一つを背負うのは辛かった。俺が生きている限り、イシュヴィリアナをもう一度、と思う者は少なくないだろう。一人一人の命を引き換えに生きながらえたんだ　己の責務を果たせと罵られても仕方ない」

それは、王子であつた頃以上の重荷だつた。

「死ねば楽になるだろうと　もともとそうなる運命だつたんだんだから。そう思ってた。俺はイシュヴィリアナの亡霊だと。……でもおまえは生きてくれと言つた」

そつと、アジムがクシャナの顔を隠すベールを取り去つた。クシャナも抵抗はしない。

「だから、運命とやらに全力で抗つた。それだけだよ」

クシャナを見つめてくるアジムの顔は穏やかだつた。

黒い邪魔なベールが取り払われて、視界が明るくなる。夜にベールを被ると、驚くほどに目の前の人の顔が見えないのだということに気づかされる。

微笑むアジムの顔は、十年前とあまり変わっていないなかつた。

緊張の糸が切れて、涙が溢れ出しそうだった。

アジムがここにいる。

側にいる。もう離れなくてもいいのだ。

「　今、心から自分に感謝してるわ」

あの時の、自分の我儘を曝け出してくれて。それがアジムが生き

るという選択肢を選ばせたのだ。

俯いた拍子に涙が零れた。

手の甲で荒つぽくそれを拭くと、アジムの手がそれを止めた。

「泣きたいなら泣けばいい、誰も見てないから」

アジムの大きな手がクシャナの頬に触れた。壊れ物を触るように、優しく。

「泣くなって言ったり、泣けって言ったり　私はどうすればいいの？」

アジムの優しい言葉と仕草に、クシャナは困ったように微笑む。今も耳元に残るアジムの優しい言葉。

『泣くな、クシャナ』

あの甘い響きを、今でもはつきりと思い出せる。

「簡単だよ。悲しんで泣くんじゃないならそれでいい。俺のために泣くんだったら？」

なんて偉そうなセリフなんだろう。

クシャナは苦笑した。

「アジムのために泣いてるんじゃないわ。ただ　気が緩んだだけ強がってそんなことも言ってみたが、アジムはあまり信じていないようだった。

「どうでもいいよ。クシャナが幸せなら」

嬉しくて流れる涙もあるのだと、クシャナはこの時初めて知った。その涙は温かく、優しく、心の中で凍っていた何かをゆっくりと

溶かしていく。

胸に温かいものが溢れる。

それは、幸せという一言では納まりきれないほどの、喜びにも似た感情だった。

11：約束の場所（後書き）

「本当は、約束通り攫おうかとも思ってたんだ」

今日のアジムはいつになく饒舌だな、と思いつながらクシヤナは彼の言葉に耳を傾ける。この数日、彼は散々悩んだんだらう。

「でも　クシヤナがこのオアシスを愛してるってことは知ってたし、何より俺はもう王子じゃないんだ。婿になれるだろ？　でもまあ成人の儀の内容を知ってからはその可能性もなくなったわけだけど」

そう言われて、クシヤナは自分がここにやって来た理由を思い出した。

「そのことだけどね、アジム。神様は伴侶を選ばないんですって」
やっと乾き始めた涙を拭いながら、クシヤナが呟く。

「へえ？」

唐突なクシヤナの話に動揺することもなく、アジムは相槌を打った。

そのあっさりとした反応に首を傾げつつ、クシヤナは巫女から聞かされた話を一通り話した。神の加護を得たという象徴の為の成人の儀なのだと。

「なんていうか拍子抜けだわ。知らない相手と結婚しなきゃいけないのかって思ってたし。お父様もお母様も仲が良いから、そういう結婚でも上手くいくもんなのかと思っただけ　普通の恋愛結婚だったんだもの。仲が良くて当然よね」

クシヤナの父は幼馴染の母と結婚した。つまりは十八歳の成人の儀を迎える頃には恋仲だったのだ。

今までオアシスの民としか婚姻がなされなかったのも　外に出ることの少ない君主一家で育った子供が、オアシスの外で恋をすることがなかったと、ただそれだけのことだったのだ。

「じゃあクシヤナ　おまえは誰を選ぶんだ？」

意地の悪いセリフだ、とクシヤナは思った。

アジムは優しくクシヤナの頬に触れたまま、もう片方の手で髪を撫でた。

「……ねえ、アジム。私分かりきっていることを聞くのって卑怯だと思っわ」

お互いに、どれだけ大事かなんて分かっているのに。

クシヤナの可愛らしい一言に、アジムは微笑む。

「じゃあ、このままキスしても怒らないか？」

「……分かりきってるけど、何も言わないでそういうことするのはズルイんじゃない？」

つまりは、クシヤナはアジムから言っただけで欲しいのだ。それに気づいていながらもアジムは散々焦らした。クシヤナがあんまりにも可愛いから。

「今更だろ？」

「今更だけど、言っただけ」

クシヤナの懇願に、アジムはしかたないな、と呟く。

もともと言うつもりだったのだから、別段支障はない。

ただ言う限りは、クシヤナにも言ってもらっただけ。

「好きだよ」

額と額をつけて、アジムはクシヤナだけに聞こえるように囁く。

二人しかいないこの場で聞いている者など誰一人いないが、普通の声で言うのはやはり少し照れる。

クシヤナは今まで見たことのないようなほどに美しく、それは大輪の花のように、輝く太陽のように。とても幸せそうに、微笑んだ。

「私も、好きよ。誰よりも」

言葉にするのも悪くはないな、とアジムは思う。

こんなにも綺麗なクシヤナを独り占めできるだけでなく、こんなにも幸せな気持ちになれるのだから。

「 ちょっと待つて。でも何も解決してないわ。オルヴィスがまだオアシスの近くにいてるんでしょ？」

それではアジムの身の危険は守られていない。

良い雰囲気を簡単にぶち壊すクシャナの言葉にアジムは苦笑した。これも自分の身を心配してくれているからこそその発言だと分かっているから、腹は立たない。

「大丈夫だよ、クシャナ。砂漠を見てみれば分かる。もうオルヴィス軍はいない」

「ど、どうして!？」

驚き、慌ててクシャナは砂の大地に目を向けた。夜ではそれは暗い闇にしか見えないが、軍がいるならば大きな篝火が見えるはずだ。夜の砂漠での野営で火無しでは自殺行為にも等しい。

二日前、確かにクシャナがオルヴィスを見つけた辺りに、それらしい火の気はなかった。それどころかここから見える範囲にそんなものはない。あるのは暗い夜の砂漠。

「嘘……」

「嘘じゃない。オルヴィスは今日……夜になったばかりの頃かな。撤退したよ」

それではクシャナが知らないのも当然だ。

クシャナは今日の昼過ぎには成人の儀の準備で大忙しだった。そして日が暮れた頃には水の祠にいたのだ。

「ここはやっぱり神に愛される土地だったってことだ」

「……意味分らないわ、ちゃんと説明して」
勝手に納得しているアジムに、クシャナが食いかかる。

アジムはとりあえずクシャナを自分の腕の中に閉じ込めた。クシヤナも文句こそは言ったものの、抵抗はしなかった。

「砂嵐が起きたんだ。突然、前触れもなく」

アジムの真剣な声に、クシャナも黙る。ただアジムの胸に耳を寄せて、規則的な鼓動を聞いていた。

「オアシスには被害はない。オルヴィス軍がいたところにだけ局所的に、砂嵐が起きて、彼らを退かせた。これでまたオアシスに近づくななんて馬鹿な真似、しないでろ」

「……それなら、いいけど」
それでもまだ安心しきれないのか、クシャナの返事ははっきりとしない。

「心配するなよ。これでオアシスの伝説が増えたわけだ。そして俺は神に愛される土地の、次期君主の旦那だぞ。オルヴィスだって手出しできない。そもそも馬鹿げた噂だしな」

これ以上神様の不興を買うことなんてしないでろ、とアジムが付け足す。

クシャナはただアジムのぬくもりを全身で感じ取った。

優しい手がクシャナの髪を撫でる。アジムにこうして髪を触られるのはとても心地良い。

「もう どうでもいい。アジムがこうして側にいてくれるんだから」

この土地がどれだけ神に祝福されているとか、守られているとか、もうそんなものは気にならない。

今は、このささやかな幸せに酔いしれていよう。

「アジム・アブラシード・イシュヴィリアナは、一年前に死んだんだ」

ぼつりと、アジムが呟く。

クシャナは何も言わずに、アジムの胸にもたれかかる。ジルダスという男がアジムの全てを背負って、死んだ。

アジムはクシャナを抱きしめる腕の力を、ほんの少し強めた。

「ここにいるのは、ただのアジムだ」

うん、とクシャナは答える。それでいい。

もともと身分なんてものに興味はない。クシヤナは王子のアジムに恋をしたわけではないし、アジムはクシヤナがオアシスの姫だったから好きになったのではない。

空には月がない。

邪魔するものは何もなかった。今はここに二人きり。十年前の別れの時と同じように。

まるでそうあることが決まっていたかのように寄り添う二人を、静かな夜空に輝く星達と、二人の足元に咲く一輪の青い花だけがさやかに祝福していた。

12・幸せ（後書き）

これで「月のない空、君と一輪の青い花」は完結です。
できれば一言でもこの物語の感想をいただけると嬉しいです。

ご愛読、ありがとうございました！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6247c/>

月のない空、君と一輪の青い花

2011年3月1日12時40分発行